

とある異界の電子遊戯

【時己之千龍】 龍時

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界でいつもと変わらない日常を過ごしていた『灼煉院龍燕』はその日も戦技教導官の仕事を終え、一日を終えた。

しかし目が覚めると龍燕は知らない世界にいた。

ソードアート・オンラインの二次小説。

目次

アインクラッド編

第00話	不可解な転生	1
第01話	始まりと出会い	3
第02話	手助け	11
第03話	ギルド結成	14

アインクラッド編 第00話 不可解な転生

目を覚ました龍燕はおかしいことに気づいた。知らないところで寝ていたのだ。

布団から起き上がり、部屋を見回す。すると頭に何かが入ってきた。落ち着いて入ってきた何かを確認すると、入ってきたというよりも思い出したというような、そんな感覚……記憶のようだった。

まずここは自分のいた国ではなく、別世界の国で、この身体も自分の物では無いことも分かった。それから記憶も少しずつ頭に入ってきた。ただ二人分の記憶が頭に入ったせいか少し頭痛がしてくる。

龍燕……ここでは龍旗（リュウキ）の記憶を少しずつ思い出して纏めてみると、まず家族構成は……一人暮らし。幼い頃に両親を無くし、その後はこの屋敷の主だった龍旗の祖父、龍城（リュウセイ）という人だが、半年前に事故で亡くなっていた。

その亡くなった祖父は、二刀流剣術の達人だったが腕の振るえるところがほとんどなく、やっつとで見つけたのはSAOというゲームの世界に入って戦うもので、そのβ版に当選し当たっていざ行こうとした時になくなったようだった。β版すらできずだったが、孫の龍旗は正式版で代わりに入り、二刀流でクリアすることを考えていたようだ。

SAOというゲームは記憶によると昨夜のうちに龍旗が寝台で用意しておいたようで、兜の様なものから線が伸び、機械へ繋がっているのを見てすぐに分かった。それからその機械の隣にSAOと書かれた箱があったため、説明書と棚にあったその関連の本を少し読み、多少はどんなものかわかった。

「開始は……まだ時間待ち、か」

頭に、時間待ちで昼寝をしていたことが頭に浮かんだ。

何故自分がこうなったかわからないが、まあいいかと思ってしまう。多分意識はないが、龍旗も龍燕も大きくは気にしないという性格

がかぶっているからかもしれない。またそれ以上に龍燕がSAOと
いうのに龍旗の記憶もあるからかもしれないが、強い興味を持ってし
まった。

そこでふと気づいた。時間待ちには気づいたが、何時まで待ちなの
かが思い出せなかった。辺りを再度見渡し、今日の日付と今の時間ま
ではわかったところで、暦表が頭に浮かんだ。

「暦表に……書いた」

龍旗は急いで暦表を探し、見つけ出す。

「あつた。ええと……11月6日の、午後一時か……ん、あと十分くら
い?……:……というか羅暁と時間の数えが違うのか」

時計の針の差す数字から見て、龍燕はさらに気づく。龍燕がいた世
界……羅暁国では一時間が百分。一分が百秒だったがここでは大分
違うようだった。さらには一週間の日数も、十日だったのがここでは
七日と短い。気を付けないといけないなと思った。

「考えている内にあとわずかか。あ、設定があるとか書いてあつたか
らもうそろそろ入ってみるか」

龍旗はナーヴギアという兜の様なものを被って横になった。それ
から説明書にあつた始まりの言葉を口に出した。

「リンクスタート」

すると起動音が流れた。それから音声が発せられる。その音声の
指示にしたがつて設定を行った後、次に移った。

言葉と同時に感覚の全てが消え、意識が何かに飲み込まれるような
感覚を受けた直後に真つ暗だった視界が真つ白になり、五つの何か言
葉が表示されては消えていき、次に正面に『welcome』の文字
が現れた。

それから名前を決めたり、容姿を決めた。また他にもいくつかの設
定を進めていき、やっとゲームが始まった。

第01話 始まりと出会い

龍旗^{リュウキ}……アバター名『シエン』は段々と感覚が戻るのを感じ、ゆっくりと目を開けた。辺りは自分の部屋ではなく、広い円形の広場だった。そしてあちこちでゲームに入ってきた参加者達の姿が現れ始め、広場を埋め始めていた。

「ここが……SAOというゲームの中、か」

今のシエンの姿は現実の龍旗のを少しいじっただけの、言ってしまうと手抜きに近いが細かいことより早くゲームを始めたかったシエンは気にしてはなかった。

「ん、うお?!」

「ん」

振り返るとちょうど自分の真後ろに生成されたのか、少女が驚いた顔をしていた。

少女の姿は肩より少し長めの髪に、頭にヘアバンドを飾っていた。

「あ、すまない……驚かせたか?」

「えと、少し……。あ、そうだ。一緒にプレイしない?」

「一緒に?」

少女はうんうんと笑顔で頷く。

「こんな近くで出現して、この世界で初めて逢ったのも何かの縁かもしれないし。ダメ……かな?」

「いや、俺は構わない。一人よりは複数人いて助け合える方がいいかな。俺はりゅ……いやこの世界ではシエンだ。よろしく」

シエンは少女に手を差し出すとすぐに握り返してきた。

「ボクはユウキ。よろしく! ええと……まずどうしようか」

「そうだな。確か手を振るとメニューが出るんだっけな?」

前もって読んでいた説明書通りに右手を縦に振り下ろす。するとメニューが表示され思わず、シエンはおおと声を漏らしてしまった。

「装備は……片手直剣、か。出来れば刀がいいが……多分ないか。武器屋を確認してから狩りに行ってみようか」

「うん！そうしょ！」

二人は武器屋を見つめ、品を見ていく。

「やっぱ刀は無いみたいだ。刀身の曲がり少し気になるが、代わりに曲刀というのを買うか」

そう言つてシエンはNPCの商人に声をかけ、曲刀を二振り購入する。

「ユウキはどうする？」

「ボクは……今のままでいいかな？そういえば二本買ってたけど、片方は予備？」

シエンが曲刀を二振り買ったのを見たユウキが聞いてくる。それをシエンは首を横に振り答える。

「俺は二刀流でな。この世界でも有効かどうか見てみたいんだ」

「そうなんだ。二刀流かあ……格好いいな」

見るの楽しみと言いながらユウキはワクワクと笑みを浮かばせていた。

町から出て少し歩き狩りの出来そうなところを探していると、猪が出現しているところをみつけた。そしてその猪を相手にしている二人が視界に入る。

「ほう、剣が光ってるな」

「うん。あれがきつとソードスキルだよ」

あれが、とシエンは呟く。それから数度頷き、シエンは口を開く。「あの様子から指南を受けているようだな。交ぎってみるか。ソードスキル以外にも、よい情報が手に入るかもしれない」

「あ、そうだね。教えてもらおう」

するとユウキはねえねえと走りながら二人に声を掛けに行く。シエンはその後を追った。

「ソードスキルを教えるんでしょ？できたらボクたちにも教えてもらえないかな？」

「別に構わないけど、君達は？」

「俺はシエンだ。こっちは」

「ボクはユウキ！よろしくね」

「俺はクライン」

「……キリトだ。よろしく」

お互いに簡単な自己紹介を済ませ、猪の方を見た。それからソードスキルの説明をクラインとユウキ、シエンは聞き、順に猪を相手に実践を行った。そして皆が一匹ずつ倒したし終えたところで、シエンはやってみたかった事を実行してみることにした。

「素人考えに二刀流は危ないぞ？」

シエンが両腰にそれぞれ一振りずつ、曲刀を差したのを見たキリトが忠告する。

「このゲーム、本当は俺の祖父がやるはずだったんだ。祖父は現実では二刀流を使っていて、代々受け継いできた流派を何処かで使ってみたいと考え、やっと見つけたのがこのSAOだったんだ。祖父はβ版には当たったがやる少し前に事故で亡くなってな、ここには俺が代わりに来たんだ。祖父が使っていた流派と俺のとは違うが……有効かどうか試してみたいんだ」

そう言っつてシエンは両の手に曲刀を引き抜いた。

「灼煉院家本家眞炎流……いざ参る」

猪に近づき、気づいた猪はシエンに向け突進を始めた。シエンは猪に衝突する寸前流れるように右へと移動し、突進する猪の首に両手に持った曲刀を突き刺し、そのまま二閃を流れるように切り裂いていき、曲刀が抜け数秒を置いて猪は硝子のように砕け散った。

単純だが全ての動作に無駄がなく、流れるような勢いで行われたためほんの数秒の出来事だった。

「シエン、それって……剣術か？」

「灼煉院家本家、眞炎流刀剣術の二刀流。その名の通り剣術。この剣術は……いや説明はしにくいし、現実の話は基本ダメだったな……簡単に剣術で」

シエンは途中で話を切り換えし、納刀しつつ振り返ってみるとユウキが目をキラキラとさせていた。クラインも同様にシエンの技に惹

かかっているようだった。

「おめえスゲーな、二刀流なんて」

「うん！すごいよー！」

「ありがとう。本来は小太刀二刀なんだがな。俺はほかにも大太刀一
刀。それから格闘術が使える。格闘術はさすがにこの世界では有効
かわからないが機会がやってみたいと……いや、やってみるか」

シエンは左半身を前に出し、軽く腰を下ろして構える。

「物は試し、だな」

「うんうん」

「格闘術まで使えるなんてなあ」

ユウキとクラインがシエンをみる。先程から静かにキリトもシエ
ンを見ていた。

「レッシンヨウ
烈掌」

突進してきた猪から先程のように流れるように避けて、首を真横か
ら右掌打を放ち叩きつける。猪は突進力を無くし倒れるも再び立ち
上がる。HPバーをみれば、減り具合からそこそこ効いているのがわ
かった。ステータスの上げ具合で格闘術も有効なのかもしれない。

「シエン、ちよつといいか？」

「ん？」

今まで黙っていたキリトがシエンに声を掛けてきた。

「もし出来たら、機会があれば二刀流を伝授してほしい」

「ああ、構わないよ」

「あ、俺も大太刀の一刀の方を教えてほしいぜ」

シエンは機会があれば教えるとかラインにも答え、その後夕方辺り
まで雑談や攻略法

を話したりしながら過ごした。

「もう五時半になるな。俺はもうそろそろ落ちるわ。五時半に熱々の
ピザを予約してるんだ」

「そうか。あ、そういえばフレンド登録っていうのやってなかったな」

そのシエンの言葉にそういえばと三人が眩き、今更ながら登録し
あった。

「じゃ、またな」

「ああ、またな。また一緒に狩りをしような」

クラインはニツと笑い、右手を振ってログアウトボタンを探す。

「あれ？」

「ん、どうしたの？」

クラインの声にユウキが聞く。

「ログアウトボタンがねえ」

「よく見てみるよ」

簡単に説明しながらキリトもログアウトボタンを表示しようとメニューを開く。しかしあるはずのログアウトボタンがなぜか『空欄』となっていた。

「確かにないな」

「ないね……ってどうするの？」

確かめたシエン、ユウキも同様に驚きながらキリトにいう。β版を経験し、このゲームに詳しいキリトに聞く他に三人はわからない。

「退出方法はメニューを操作してログアウトボタンを押すしか方法はない」

「他には本当にねえのかよ?!」

クラインが色々と思いつく言葉を口にし、ポーズまでとる。しかし何も起こらない。

「ないって言ったろ」

「しかし、これは運営側にとって致命的なものだろうか？退出ができない。今やったがGMコールというのも全く反応がない。普通なら放送を流し、対処を始めてもおかしくもないはず……」

何度かGMコールをやっていたが無駄と知り、メニューウインドウを消して腕を組ながらシエンは言う。

「そうだな。今後の運営にも関わるし、適切な方法として向こう側から強制ログアウトがあるはずだが……」

するとごーん、ごーん……と鐘が辺りに響き渡り、四人は強制転移を受けた。転移の先、着いたのは開始時に最初にログインをした広場だった。辺りにはプレイしていた他のプレイヤー達、およそ一万人が

広場に集まっていた。

「こ、こっちは？」

「広場だな。キリトの言っていた強制ログアウトをやってくれるのか？しかし、なんだか怪しい感じがするな……」

わざわざ集めず簡単に説明して、それから強制ログアウトでも良いのではないかとシエンは思った。

「ん……ユウキ、上」

「上？……何あれ？」

ふと気づき、シエンはユウキに言いながら上を見上げる。

「……どうやら強制ログアウトではないようだな」

「どうして？」

「演出がおかしい。それでそんな感じがする」

赤く染まった空。そこから血とも思えるような赤い液体が漏れ出すように溢れ出て、

宙に形作る。その液体は顔のない、赤いローブの巨大なアバターとなった。

『諸君、私の世界へようこそ』

赤ローブから歓迎の言葉を述べられ、ログアウトボタンが消えているという『バグ』さえなければ何かのイベントと思える言い出しだった。そして赤ローブは茅場晶彦と名乗った。茅場晶彦はこのゲーム世界を作り上げた人物で、ログイン前に見た本に載っていたためシエンも少しは知っていた。

それからログアウトボタンが無いことはこのゲーム本来の仕様ということ。次に外部の…現実世界の状況を説明し始め、既に二百名以上が死んでしまった事を告げた。

『次に、β版にはなかったOSS……オリジナルソードスキルを新たに実装しておいた。ソードスキルは私がほとんどを作り上げたものだ。とすれば最終ボスとして現れる私に対し不利であることを考え、自ら作り上げる事ができるOSSは君達にとって希望のようなものだ。詳細はヘルプ欄に記入しておいたので、興味があれば読んでみることをお勧めする。そして最後に……』

赤ローブは左手を振りメニューを操作する。

『君達のアイテムストレージに贈り物を入れておいた。確認したまえ』

シエンとユウキはそれに従い、アイテムストレージ欄を開きそこにさつきまではなかった『手鏡』を押し、オブジェクト化して手に取った。

その手鏡は特に変わったところはなかったが、突然自分も含め辺りにいたプレイヤーの皆が炎に包まれ、姿が変わっていった。

「なんだったんだ……」

「あれ……シエン、なの？」

ふとユウキからの言葉にシエンはユウキをみた。

「ユウキなのか？ いや、声はユウキだが……」

ユウキの姿が先程と少しばかり違っていた。単純に肩より長かった髪が肩上までの長さになっている。

「姿が少し変わったけどシエンなんだね？」

姿？ と呟き、シエンは手に持っている手鏡を再び見てみる。そこには何故か、前世の姿……『龍燕』の顔があった。いや、近い容姿だが正確には現実世界の龍旗の姿だろう。

「なぜ……この姿に？ いや今はいいか」

辺りも大分変わり、装備は変わらなかったのかスカートを履いた可哀想な男性がかなり増えていた。恐らくアバター設定時に性別を変えていた人達なのだろう……。

「あの茅場って人はなんでこんなことしたの？」

「俺にもよくわからないが……こんなことしたんだ。本人が説明してくれるだろう」

シエンとユウキは再び赤ローブを見上げる。そして何故こんなことをしたのかを言った。

『この世界を作り出し、観賞するためにのみナーヴギアを、ソードアーツ・オンラインを造った』

シエンはそんな理由でここにいる約一万人を箱庭の中に閉じ込めたのかと、最悪な天才だなと思った。

そして赤ローブは姿を消した。それからしばらく静寂が包んでからドツと怒鳴り声や悲鳴などが飛び交った。

「来い、シエン、ユウキ」

「……キリトか、ユウキ行くぞ」

「え？あ、うん」

シエンはその声からキリトと分かり、ユウキを呼んでついて行った。

クライン、シエン、ユウキはキリトに連れていかれ、狭く他に誰もいない路地へ入った。

「いいか、よく聞け。茅場の言うことが本当なら自分を強化しないと
ならない」

「と、なると次のところを拠点にした方が得策、か」

シエンの言葉にキリトは頷く。

「ああ。ここら一帯は狩り尽くされるだろう。それでだ、俺なら次の村までの安全な道のりを知ってる。一緒に来ないか？」

キリトの申し出にシエンとユウキは着いていくことを決めた。しかしクラインは友達のことにも心配だと言い、ログインしているはず友達と合流して行動すると返した。

「またな、クライン」

「何かあったら呼んでくれ。駆けつける」

「また会おうね」

「おう、またな」

クラインと別れ、キリト、シエン、ユウキの三人は次の村へ向け走った。

第02話 手助け

デスゲーム開始から一週間が過ぎ、シエンとユウキはキリトと別れた。別れた理由としては、他パーティーを助けることにキリトは余裕がないと言ったからだ。

別れた後レベリングをしながら二人は迷宮区を進む。ここ一週間はキリトの判断で突き進んでいたが、もうそろそろ追いついてくるかなど思っていた。そして迷宮区を出ようと出口に向かっていた時、モンスターに襲われているパーティーを見つけた。しかもモンスターの数が多いため苦戦していた。

「ユウキ！」

「うん！」

二人はそれぞれに武器を引き抜き、駆け出す。

「助太刀する」

「あ、ありがとう」

シエンとユウキが加わったことで二十体ほどいたモンスターを速やかに倒し、迷宮区を出て一息ついた。

二人はダメージはほとんど皆無だったが、助けたパーティー側は皆赤近くまで減っていて危険な状況だった。

「ありがとう、助かったよ」

回復薬を飲みながらパーティーメンバーの一人が言う。

「いや、助かったならよかった。君らはパーティーだよな？長は？」

シエンの問いにパーティーの皆は眼を背ける。それでいいのがわかった。

「そ、そうか…いままで良くやってこれたな。まあまずは自己紹介だな。俺はシエンだ」

「ボクはユウキ。よろしくね」

シエンの隣で小さく手を振りながらユウキが言う。

「俺はアキラだ。改めて二人には礼を言うよ。君達はいつも二人で、あそこで狩っているのか？俺達五人で苦戦していたのに…：…凄く強

いんだね。もしかしてベータテスターだったのか?」

「いや、俺もユウキも初心者から始めた。ゲームを始めた日に、そのベータテスターの一人に指南を受けてな。それからは俺の場合は現実で武術をやっている、ここでもそれが有効だったんだ。ユウキの場合は覚えが早かったりしてな」

「そ、そんなことないって! シエン達の教え方がとても分かりやすいんだよ」

シエンの言葉にユウキが顔を紅く染めながらいうと、アキラ達が笑った。

「そうなのか。じゃあ俺もお願いしてもいいかな」

アキラが少し真剣な顔になり、その仲間もアキラが何を言おうとしているのか予想したのか静かになった。

「俺達に剣の使い方教えてくれないか?」

「…うむ。ユウキはどう思う?」

「シエンがいいなら僕もいいよ」

「わかった、教えるよ」

「!、ありがとう」

シエンはそのパーティーに剣術を指南することになった。今日はフレンド登録して一度解散し、翌日に迷宮の入り口で待ち合わせることにした。シエンは食材を出すモンスターをユウキと狩った。

「今日はいっぱい狩るね。みんなの分?」

「ああ。それにこの世界の食事はイマイチだからな。自分で料理のスキルを地道に上げて作らないと幅も広がらないし……現実なら材料次第で結構作れたんだがな」

「料理できるんだ。凄いな」

「現実世界へ戻れたらご馳走するよ。さてだいぶ集まったな」

周りのモンスターを狩りつくし、いないことを確認する。握り飯を作りたいたいが米がないためサンドイッチだ。葉の物は採取で先程揃えて、肉もだいぶ集まった。今のメンバー分なら一週間あるかどうかの

量かな。

「さて夕方か。帰って夕食にしよう。まだ料理スキルが低くてサンドイツチだな」

申し訳なさそうにシエンが言うとユウキが首を横に振った。

「ううん！シエンのサンドイツチはおいしいよ。お店で売ってるのはただのパンとかだし。それにそのパンだと味がほんとにいまいちだもん。だからサンドイツチが作れるだけでも幸せだよ」

「ありがとう」

シエンはもつといろいろな料理が作れるようになったら、まずはユウキに食べさせてあげたいなと思った。

第03話 ギルド結成

デスゲーム開始から二週間が経った。

シエンとユウキは共に互いのレベルを上げながら、危なそうな人達や危険になった人達を最優先に助けていた。

そして助けられたパーティー達がシエン達と一緒にレベル上げるようになり、気付けば三十人を越えていた。

ある日、最初に助けたパーティーのリーダー、アキラがシエンに声をかける。

「あのさ、シエン」

「どうした」

「皆にも言いたい。デスゲームが始まって二週間が経ち、シエン達と一週間一緒に戦って思ったことがある。シエンと一緒になら、このデスゲームもクリアできるかもしれない。だからシエンをリーダーにギルドを作らないか？」

アキラの提案に皆が顔を見合わせた。

「ギルド……か」

「いいと思う」

「やろうぜー」

周りから声上がる。

「わかった。皆、ついてきてくれるか？」

シエンの問いに皆が「おう」や「はい」「どこまでもついていきます」と答えた。

ギルド立ち上げを決めて三日目。ギルドができた。人数は35人。シエンが総隊長。ユウキが総隊長補佐だ。デスゲームが始まって最初のギルドだった。

「今日はギルド『戦英旗隊』センエイキタイの記念すべき日だ。飲み、食べ……共に祝おう！」

あちこちで乾杯の声が上がり、数人はジョッキが割れるということもあったがそれはそれでさらに盛り上がった。ちなみに料理はシエンの手製だ。

『戦英旗隊』。戦は最強集いで、弱い者を助ける意味。英は利益を分け与え笑顔を増やすと言うのでつけた。

それから初期の分け方で、前線組、教導組、製作組の三つだ。

前線組は高レベルの集まりでボスとやり合い、迷宮区にも挑む。

教導組はレベルはまだ弱いが、将来的には攻略組に入りたいという者達で、できる限り安全に、効率よく教導する組。

製作組は基本後方支援で、前線組や教導組の武器防具を生成したりする組。

ギルドの資金は、前線組や教導組から得た金やアイテム。それから製作組が熟練度を上げるのに作ったものを売ったりして得る。

ギルドを作り、制度等も安定してから二週間が過ぎた。そしてシエンやユウキ、他の前線組が戦英旗隊用の制服を作ることに決めギルド内の皆からシエンが決めるのがいいということになり、記憶にある胴着を基本として、その上に羽織や鎧を考えた。

「デスゲームが始まってもう二ヶ月になるのか」

「うん。早いね」

シエンとユウキが敵を軽く倒しながら話す。他の前線組は今も別行動だ。何故かお二人で仲良くどうぞと言いながら別のところへ行ってしまった。なぜかユウキはありがとうねとお礼を言っていたが、シエンにはよくわからなかった。

「ん、前に誰か……数名いるな」

「わかるの？ボクには見えないけど……」

「現実世界で武術をやっているな。気配を感じとる……技のようなもの。最近、この世界でなれてしまったのかだいぶわかるようになって

きた」

「凄い！武術をやってたんだ」

「凄いかな？」

周りにモンスターに囲まれ戦いながら、平然と会話をしていた。そして倒し終えたところでその気配の主達ってきた。

「こんにちは。調子はどうか？」

シエンがパーティーに話をかける。

「こんにちは。調子は上々ですよ。向こうの階段上がった先で、ようやくボス部屋を見つけましたしね」

「見つけた？じゃあ……」

「これから戻ってすぐにパーティーやソロ達に伝えて、早速明日にでも攻略会議をやろうと思ってる。シエンも来てくれるかな？」

「ああこちらの前線組を揃えていくよ。ん、俺のことを知っていたのか？」

「二人は有名だよ？『夫婦で』ギルドをやっているってね」

それを聞いてユウキの顔が一気に真っ赤になった。

「ぼ、ぼボクとシエンが夫婦だって?!」

「あれ、違うのかい？」

パーティーリーダーがおかしいなあと頭を掻きながら声を漏らす。その後ろのパーティーメンバー達も同じ感じだ。

「ち、ちちち違うよ。シエンとは……まだ……」

ユウキは下を見ながら黙り込んでしまった。

「あはは。『まだ』だが、いつか『攻略』するよ」

シエンが笑いながらパーティーリーダーに言い返すとユウキが目をぐるぐるにして後ろに倒れてしまった。

「あ、大丈夫かユウキ？しっかりしろ！」

すぐにシエンが倒れたユウキの肩を持つ。

「刺激が強かったかなあ……」

「ちよつとやり過ぎてしまったな」

「仲がいい夫婦になりそうだな」

「ボス攻略くらいに楽しみにしていますよ」

「また会いましょう」

パーティーメンバー達も笑いながら行ってしまった。

「さてどうするか」

とりあえずユウキを端に寝かせて、シエンは休憩することにした。